

「NO」と言わない自分でありたい

JICA 経済基盤開発部の杉田樹彦さんは、紛争・災害後の復興支援を担当し、国づくりの基礎となるインフラ整備の重要性を確信している。

学

生時代は、実は、国際協力とほとんど縁がなく、どちらかというところ、子ども向けの国際交流を中心に活動していました。でも、たまたま留学先のアメリカで知り合ったネパール人が日本語であいさつしてきて「JICAの専門家に教えてもらった」と。そこで、日本のJICAのことを初めて知ったんです。卒業後は、環境分野の仕事がしたいと思っていたのですが、社会貢献にも興味があり、その両方に携われるJICAに挑戦することにしました。あと、そもそも飽きっぽい性格なので(笑)、いろんな国でいろんな分野の仕事ができる点も魅力でした。

日々の業務で感じているのは、本当に人とのつながりに支えられた仕事だというところ。開発途上国の政府関係者や地域住民、各分野のプロフェッショナルである日本人の専門家、NGO、エンジニアの方々…。さまざまな人の声とともに、全員の「思い」を実現していくのが私たちJICAの役割です。

就職6年目、それまで本部で担当していた復興国の現場を自分の肌で感じたいと、自ら希望してアフガニスタンに赴任しました。実際、すぐそばで爆発音が聞こえるなど、緊張感に包まれることも少なくなかった。でも2年間、まさに



JICA経済基盤開発部
都市・地域開発グループ

杉田 樹彦
SUGITA Shigehiko

大学卒業後、2002年JICAに就職。筑波国際センター、無償資金協力部(当時)、アフガニスタン事務所、海外長期研修(イギリス)を経て、09年9月より現職。

復興の真ただ中にあるこの国に身を置き、あらためて実感したのが、インフラの重要性です。10年、20年先を見据えた時、国づくり、人づくりを支えるのは、やはり、道路、橋、電気、水道といった、人間が生きる上で必要な「礎」なのです。現在は、スリランカ、スーダン、コンゴ民主共和国、ハイチなどで都市地域の復興支援を中心に担当しています。非常に迅速な支援が求められる分野ですが、相手のニーズに的確に応えるため、すぐに現地に入り、何が求められているのか、そして、それが実現可能かどうかを相手国の政府と議論しています。

また、支援の受け手となる住民からもしっかりと話を聞きます。復興支援で大切なのは、コミュニティー再生に向けた「協働」のきっかけづくり。各地域の文化や歴史的背景をふまえて、住民の目線に立ち、復興計画や経済再建のためのインフラ整備について、政府関係者とアイデアを共有し実現していくことが重要だと感じています。

今年3月には、スリランカ北西部のマナー島に「新マナー橋」が日本の協力で完成しました。四半世紀にわたる紛争の激戦地であったこの地に、本島とつながる唯一の交通手段が復旧されたのです。激しい戦闘下、工事中断を余儀なくされ

ながらも、日本人技術者、対立していた2つの民族の労働者が共に汗を流してできたこの橋は、人々の「希望」の象徴になっています。



現地の人とのコミュニケーションを大切にしている杉田さん。「国と住民の声をつなぐ懸け橋になりたいと思っています」

インフラは「人の集まる場」を創出します。道路や橋が完成すれば、その瞬間からモノが動き出し、人と人とのコミュニケーションが生まれる。人が交わり集うことで、社会は発展していくのです。そういう意味でも、インフラは貧困削減のための重要なツールといえるのではないのでしょうか。

私が日々心掛けているのは、「NO」と言わないこと。もちろん、時には対応できないこともあるかもしれませんが、それでもまずは、相手の要望を受け止めて、どうすれば実現できるか、と一緒に考えていきたい。そして、国際機関、NGOなど他機関との連携を強化しながら、JICAの強みをパズルのように組み合わせ、点から「面」の協力につなげていきたいと思っています。



(上)スリランカ北部のマナー県で、住民からヒアリングをする杉田さん(右)
(下)アフガニスタンでは国際空港の建設も担当。「国の玄関口である空港ターミナルが少しずつ形になっていく様子は、アフガン復興の着実な一歩を示していたと思います」

